

13. SOS！ 無人島脱出！

各務原市立緑苑小学校6年

竹村 彩 増田 朱莉

森元 千晴 山崎 きずな



敦賀市立敦賀西小学校5年

大和田 和哉 高野 映基

松永 光希 渡辺 翔太

6年

佐藤 亮太

私は、七美。中学一年生の女の子です。

七月の夏休みが近づいたある日、同じグループのさくら、桃子、まさあき、かずや、りくとこの六人で海へ遊びに行くことになりました。

七月二十四日、朝八時、並木公園に集合。

行き先は北斗海岸。電車に乗って二時間。

七美は、海に持っていく物を準備しながら、どんな海かなと思っていました。

海でビーチバレーをしたいな、電車の中でどんなゲームをして遊ぼうかなど、いろいろなことを考えていました。

楽しみが、どんどんふくらんでいきます。

さくらと桃子もいっしょです。

「ねえ、どんなぼうしをかぶっていく？」

まさあき、かずや、りくと達にも電話をして、どんなバックがいいか、相談したりもしました。

前日の夜は、楽しみで胸が高鳴り寝つけませんでした。

うとうととした時、こんな夢を見ました。

ある朝、家のくつ箱をあけると、何とそこには、動く人形がいたのです。『くま』『へび』『鳥』『犬』。

その動く人形が言うには、『ソウ』という偉いおぼうさんの所で修業中に、ソウの息子『カイト』に、魔法で人形にかえられてしまったというのです。そして（こんなせまい所にとじこめないで、私達をいっしょに海に連れてって）とうたえるのでした。

かわいそうに、何とかしてあげなくてはと思いましたが、そのままねむってしまったようです。

翌朝、七美が家を出て並木公園に行く途中、さくらと桃子の二人に会いました。並木公園に着くと、まさあき、かずや、りくとこの三人も、もう来ていました。学校で会うのとは、ちょっとちがった感じがします。

さあ、六人で北斗の海に向かって出発。

電車の中から見える風景が変わって、山や川や田んぼが少なくなってきましたが、夢中でおしゃべりやトランプゲームをしていて、気付きませんでした。

遠くに海が見え始めました。

「もうすぐ海だ」

みんなの声が、はずんでいます。

うきうきわくわくで、はちきれそうです。

駅からちょっと歩くと、もうそこは、海でした。

さっそく水着に着がえて、ビーチバレーをしました。

七美、さくら、りくと、桃子、まさあき、かずやです。

やっぱり男子が二人いる桃子チームがリードし、七対三で桃子チームが勝ちました。

そのうちに、ビーチバレーもつまらなくなりました。

「ねえ、ボートに乗らない？」

さくらの意見にみんなが、

「いいね。乗ろう、乗ろう」

と賛成しました。

さっそくボートに乗りこんで、沖を目ざしました。こぎ手は、りくととまさあきです。

海の水がきれいでおしゃべりをしているうちに、出発した海岸が見えなくなるほど遠くまで来てしまったようです。

「こんなに遠くまで来てしまったよ。もう帰ろう」

りくとが言いました

「うん、そうしよう」

みんなも賛成しました。ボートの向きをかえて、陸に向かってこぎ出そうとした時、急にあら波がボートをおそいました。

どれぐらいたったのでしょうか。

七美は、自分が砂浜の上にねていることに気づきました。

さっそく、すぐそばに横になっていたさくらを起こしました。

七美とさくらの二人で、他の四人をさがしました。

四人共ちょっとはなれた砂の上に、横たわっていました。

六人は、これからどうしたらよいか相談をすることにしました。

とにかく、食べ物をさがさなくてはなりません。

ボートは、どこかに流され、少しだけ持っていたチョコレートやお茶もありません。心細くなってきました。

グーとパーで分かれ、グーチームは食べ物をさがし、パーチームはこの島（無人島だろうか）を探さくすることになりました。

七美、さくら、りくとの三人は島の探さくに出かけました。先頭になって砂浜を歩いてたりくとが、大きな声で七美達を呼びました。

「さくら、七美、来てくれよ。なんだこれ？」

よく見ると、なにか光っているものがうまっています。それを両手でほり出しました。

うまっていたのは、びんでした。そのびんをよく見ると、紙が一まい入っています。

☆

一方、桃子達が食べ物をさがしていると、きれいな湖が目の前に現れました。動物達が、湖の水を飲んでいました。

試しに桃子、まさあき、かずやが水を飲んでみました。

「何これ？ 天然水みたいにおいしいよ！」

まわりには、見たことのない果物やおいしそうなきのこもありました。

三人は、夢中で果物やきのこを取りました。

すると、いきなり、

「私の畑をあらすのはだれだ」

と、湖の底からひびくような声が聞こえました。

湖の方を向くと、湖が真っ二つに割れ、中から自分達と同じくらいの歳の男の子が出てきたのです。

その男の子は、

「なんだ、父さんじゃないのか……」

とがっかりしたように言うと、

「ついてきて」

と言って桃子達を呼んでいます。

三人はいっしょに顔を見合わせてから、その男の子についていくことにしました。

不思議なことに、男の子が歩くと湖が割れていきました。

そして男の子が立ち止まってうでをひとふりすると、あっというまに家のような所に着きました。

ソファにその男の子が乗り、自こしょうかいをしました。

「ぼくはカイト」「私は桃子」

「ぼくはまさあき」「おれはかずや」

「ところで、なんでカイトは一人でここにいるの？」

「父さんとけんかした。父さんがぼくが冷やしておいたプリンを食べたんだ！」

(変な理由)と、桃子たちは思いました。

「けど、もう父さんを許してあげようと思ってるんだ。でも、一人じゃ心細いんだよ」

「それじゃあ、ぼくたちと行こうよ」

と、まさあきが言いました。

そのころ、ビンの中身を解読していたチームは困っていました。

「これ、なんて読むの？」

しばらく考えていましたが、ちっとも意味が分かりません。

「なんじゃ、この文が読めんのか。まあ、古いからのう」

突然後ろから、少し年をとった男の人が出てきました。

そう、この人こそ、カイトくんの父、ソウさんです。

「あなたはだれですか？」

「ん？ 私はソウじゃ。それはそうと、この文が読めんのじゃろ」

「はい」

「これは、『一つの島に一つあり。石像を真ん中に持ってこい』じゃ」

「なんで分かるんですか？」

「そりゃあ、これを書いたのはこの私じゃからのー」

「えー！」

「なんでびっくりするんじゃ？ 地図に『ソウ』と、はんこが押してあるじゃないか」

「ほんとだ！」

三人はなっとくしました。

「なぜこんなところに一人でいるのですか？ ここには一人しかいないのですか？」

「まあまあ、あわてるでない。一つずつ話そうではないか。この島には私と私の息子の二人がいる。今、私たちは、この場所に修行にきたのだ」

「ふーん。じゃあ、なんで一人でいるんですか」

「それは、私がカイトの冷やしておいたプリンを食べたからじゃ」

「ぶあっはっはっはー。そんな理由で！ おかしいよ！」

話を聞いているうちに、ソウさんはカイトと仲直りがしたいこと、また、二人は魔法使いであることが分かりました。

「それなら、カイトくんをさがしに行こう。この石像がどうなるかも見てみたいし」

「そうか、ありがとう。実はその石像を遺跡に入れてもらわないと、魔法がつかえないんだ。カイトとけんかをしたせいで、どうやら変な魔法がかかったらしい。私にはどうすることもできないんじゃ」

「それじゃあ、私達にまかせてください」

七美達は、一度桃子達のところに帰ることにしました。

桃子達が食べ物を探しに行ったときに、木の幹に印を付けておいたので、その印を目印に歩いていきました。

しかし、途中で印がとぎれていて、そこには湖がありました。

桃子達がいません。

するとソウが、

「ここは私のうちだ」

と言いました。

さくらが辺りを見回してから、

「でも、家なんてないよ〜？」

と言いました。すると、

「いや〜、例のプリンのけんかで、カイトに家をかかされてしまったのう。魔法で探したいんじゃが、その時からなぜか魔法がつかえなくなって……」

ソウが悲しげに言いました。

その時、湖の中にいたカイトと桃子達は、周りに人の気配があることに気付きました。

「ねえ、このガサゴソっていう音はなんだろう？」

「クジラじゃないか？」

「湖にいるわけないだろ。やっぱり、人じゃないかな？」

そこで、カイトがうでをふると、部屋が消えて、湖が割れました。

「あっ、七美、さくら、りくと！」

「父さん！」

りくとが桃子達の声に気付いて、湖のそばに近づくと、なんと湖が割れて、中に七美達がいるではありませんか。

それに、カイトらしき人もいます。

「おお、息子よ……」

「そんな所にいたのかよ！ そりゃあ分からないや」

「あっ、桃子ちゃん！」

こうしてみんなは再会し、仲直りしました。

それからみんなで、石像をさがしに行くことにしました。

舟を南の島へじゃぶんじゃぶんとこいでいきました。

着いた島はいかにも蛇が出てきそうなところでした。

「うっわー。毒蛇でもいそうな所だなー」

「まあ不運だったらかまれるがな」

「やっば、いるんじゃん」

と、七美達は不安でいっぱいでしたが、運良く毒蛇には会いませんでした。石像も見つかりヒントもありました。みんなで、

「やったあ」

と、喜びました。

「次は東の島だ」

東の島は、鳥の島でした。

「うわあ鳥がいっぱいいてふみそう」

ソウたちは、鳥たちをふまないようにして歩いたのですごく時間がかかりましたが、石像を見つけました。

しかし、ヒントがありません。

「よし、ヒントを思い出そう。えーとたしか、『東の島だ。島の角にヒントが……』あっ、そうか！ 島の角だ！」

八人は島の突き出た所に行き、ヒントをさがし出しました。

「時間がかかったから、もう日が暮れそうだ。今日はここで休もう」

みんな疲れていたのか、すぐに眠りにつき、あっというまに次の日の朝になりました。

「今日は北の島だ。ふわあああー眠い」

あくびをしながらも舟をこいでいくと、北の島へ着きました。

北の島はとっても寒い所でした。

「うわあ寒すぎる」

みんなガチガチって歩いていました。

体が凍りそうになり、ゆっくりとしか歩けませんでした。

ほら穴を見つけ、そこで休憩しようと中に入ったら、偶然石像も見つけることができました。

「よし、最後は西の島だ」

そして無事に四つの石像を見つけ最初の島に戻った七美たちは、石像を遺跡にはめました。すると、

「うわあ、力がわいてきたぞ！」

「私もだ！ これで魔法がつかえる！」

カイトは前よりも力がつき、ソウは元どおり魔法が使えるようになりました。

今、八人は、雲一つない天気の良い所において、帰る方法を考えています。

「どうやって帰ろうか。」

「泳ぐ！ のはダメか……」

と悩んでいると、

「ぼくがなんとかしましょう」

「私にもやらせてくれ。私達を仲直りさせてくれたお礼じゃ」

と、ソウとカイトがにこにこ笑っています。

「わーい！ ありがとう！」

「よかったー！ 早くうちに帰りたい！」

七美はみんなと大喜びしました。

次の瞬間、目の前が急に暗くなり、七美は意識を失いました。

「七美ちゃん！ 家にいるー？」

外からさくらと桃子の声がします。

時計を見ると、夕方の五時を少しまわったところです。

「いるよー！ 今行くー！」

三人は、男の子達の所に行きました。

そこでみんなで、あの出来事は本当だったのか、夢だったのかを話し合いましたが、なかなか話は終わりませんでした。

みなさんは、どう思いますか？